

第28回

北勢線の魅力を探る

春深し山里かけるナローゲージ



山郷小学校



大辻神社



梶清左衛門碑と神戸屋嘉助碑



平野神社



教昌寺



波羅神社



貝野神社



勝泉寺



春真ただ中、鈴鹿山脈と養老山地の麓を散策します

開催日：2017年4月9日(日)

主催：北勢線の魅力を探る会

後援：桑名市、いなべ市、東員町、北勢線事業運営協議会、三岐鉄道株式会社

桑員まちのファンクラブ、都市環境デザイン会議中部ブロック

桑名歴史案内人の会、ふるさといなべ市の語り部の会

第28回北勢線の魅力を探る「春深し 山里かける ナローゲージ」

参加者 75人（内子ども2人）

協力 教昌寺住職、東貝野自治会長、勝泉寺住職、
ふるさといなべ市の語り部 樋口さん、小川さん

麻生田駅から山郷小学校へ

西 羽 晃

平成29年4月9日（日）午前9時17分に阿下喜行の電車から麻生田駅で大勢の乗客とともに降り立った。駅前にも大勢集まっている。今回は距離も長いし、雨の予想なので、参加者は少ないと予想されていたが、予想外に多い。麻生田駅にはトイレがないので、近くの萬笑院さんをお借りする。トイレを済ませて駅前まで戻ると、一行は既に出発していた。代表の挨拶があった筈だが、聞き洩らした。最終の人と一緒に歩く。アメリカの若い女性も参加している。彼女は菰野高校の英語の教師をしており、カタコトの日本語だ。背が高いため、コンパスが大きく、どんどんと差を広げられる。途中から雨が降り出し、折りたたみ傘を出す。



麻生田駅



山郷小学校へ向かう

駅から北へ向ってほぼ直線の単調な道を進む。なだらかな上り坂である。山郷小学校が見えてきたが、既に説明を終えて長い列が先へ進んでいた。そのため山郷小学校の説明を聞けなかった。説明をしたのは、この小学校の卒業生である伊藤忠さんで、彼のメモを貰ったので、そのメモと『北勢町史』に従って以下にまとめてみた。

明治政府は富国強兵のため、全国で学校制度を広めたが、明治8（1875）年に其原学校が誕生した。その後楚里（そり）学校と改称し、明治14年に其原学校、中津原学校に分かれた。明治16年に両校が統合されて再び楚里学校となって、現在地の大辻新田に2棟の校舎を新築した。その後校名の変更はあったが、明治24年に山郷尋常小学校となり、明治41年に山郷尋常高等小学校、昭和16(1941)年に山郷村国民学校、昭和22年に山郷村立山郷小学校となった。現在の日本は少子化となり、小学校の児童数が減っているのが、普通であ

るが、当校の児童数は毎年ほぼ同じ数である。それだけ付近に新しい住宅が増えていることを物語っている。



山郷小学校



語り部伊藤忠さんの説明

校庭の片隅に蛭原静修翁（源吾）先生と息子の金弥先生の表績碑が建っている。蛭原源吾先生は元桑名藩士であり、明治8年其原学校開校時に校長となり、以来一貫して教育の発展に尽くしてこられたが、明治23年亡くなられた。山郷小学校初代校長となられたのは御子息の金弥さんでした。明治24年6月1日〈創立記念日〉から明治40年3月30日まで当校に校長として勤務、大正7（1918）年まで地域発展のための人材を育てられた先生である。山郷村の教育は蛭原父子の尽力によって支えられた。

大辻神社～平野新田墓地

伊藤 忠

大辻神社

全員神社に着いた頃には雨の心配もなくなりました。神社総代さんの心づかいでトイレ、水道が使える様にご準備頂き感謝致します。

大辻神社の歴史は大辻新田の歴史そのものです。

この地の開墾は平野新田の開墾からおよそ100年後の宝暦6年（1756）、鼓村、南中津原村、北中津原村の庄屋が、桑名藩主に願い出て同年、原野の開拓が始まりました。大きな希望をもって事業に当たりましたが、水利の便がなく、黒いねば土の為、夏の旱害（かんがい・日照りによる被害）がひどく農作物の収穫は期待外れでした、その為が開墾から10年後藩主に返上しました。

それから約20数年後の寛政5年（1794）藩主から大辻新田の土地は、鼓村庄屋、渡辺三郎右衛門に与えられました。渡辺家は出入りの川瀬家らと共にまず水利事業に着手、新しい溜池、用水路を作り畑地を水田にし、さらに平野新田に落条池（おちじょういけ）を作り6町歩以上を水田にしました。

それにともない祠を建て鼓村の波羅神社より分霊して素盞鳴命（すさのうのみこと）を祀りました。

昭和63年（1988）に神殿、拝殿、社務所を新築し、現在に至っています。

昔から続けられているのが大辻神社の年1度の祭礼で神饌（しんせん・お供え）にいつも欠かさなかったのが収穫した小麦で作った「うどん」でした。神様と先祖のおかげでうどんが腹いっぱい食べられると村人は感謝しました。これが今も続いている「うどん祭り」の始まりです。

3戸で始まった大辻新田も昭和53年頃には40戸、現在は約160戸にもなり直会（なおらい・祭礼の後の御馳走）の中心は「うどん」ですが近年は御馳走も豊富になりお楽しみ行事も催され、小学校の体育館を借りての住民総出の大切なイベントになっています。



大辻神社



語り部である著者の説明

平野新田墓地

麻生田駅から緩い登り坂でしたが落伍者もなく平野新田共同墓地に予定どおり到着。墓地には語り部の樋口さんが待っていました。

目につく2基の大きな自然石の碑が道路に面して並んで建っていました。平野新田の開拓の祖、梶清左衛門（西側）、と博徒、神戸屋嘉助（かんべやかすけ）本名加治嘉助（東側）の墓碑です。

梶清左衛門は中津原の庄屋宅に寄宿していた桑名の浪人（客人）でしたが、寛永12年（1635）西野（平野新田）の開拓を庄屋共々、藩主よりまかされ、指揮を執った先駆者です。

一方、神戸屋嘉助の碑は明治13年5月4日死亡、行年35歳と彫られた碑があります。嘉助なる人物は平野新田の出身者で、桑名の穴太徳（神戸屋徳次郎）の子分です。嘉助が名を売ったのは浪曲や講談で有名な荒神山の決闘です。神戸の長吉と桑名の穴太徳が荒神山（高神山）観音寺の賭場の縄張り争いで戦いました。

長吉側の助っ人、吉良の仁吉や清水の次郎長の子分大政などと互角に戦った嘉助は当時19歳で穴太徳一家の10指に名を並べていて、決闘後メキメキ名をあげ、美濃、尾張まで縄張りを広げ穴太徳の跡目とまで言われたそうです。

語り部樋口さんの軽快で楽しい話に疲れも忘れて、平野神社を目指しました。



平野新田墓地



語り部樋口さんの説明



神戸屋嘉助の碑



梶清左衛門の碑



落条池

平野神社

西村 健二

柚井城主佐々木三郎盛綱の末裔を称する梶清左衛門安宗は、父右京進盛近とともに中津原村の里正である伊藤庄右衛門家に身を寄せ、寛永12年(1635)から新田開発に着手しました。寛永14年(1637)には平野新田と名付けられ、清左衛門はここに居を構えたといわれます。寛永16年(1639)には桑名藩主松平定綱(1592~1652)が来訪したことから、清左衛門は茶屋を設けて茶を献じたところ、定綱はこの地を大いに気に入り、後に別荘を営んだと伝わります。平野新田の「平」は定綱より松平の一字を賜ったともいわれます。

慶安4年(1652)12月25日、定綱は没し、跡を継いだ松平定良(1632~1657)は平野新田の別荘に霊を祀って参拝しました。定綱を慕っていた村人たちは定良に対して村でも定綱を祀ることを願って許されたことが平野神社の創祀です。古くは御霊明神社と称したといわれます。

現在の社殿は嘉永年間(1848~1854)の建立で、幾度もの修復がなされています。平野新田は清左衛門を祖とする梶家(庄吉安慶の代に加治と改姓)が代々庄屋を務め、神社の運営にも深く関わってきましたが、現在の境内を整備したのは特に加治敬一安典(1854~1937)の功績が大きいと言えます。

境内で最も古い石造物は文久元年（1861）8月に加治家が寄進した手水石です。昭和3年（1928）秋には昭和天皇の即位を祝って加治敬一が拝殿前の狛犬、境内入口の石灯籠、社号標柱を寄進しました。続いて昭和10年（1935）12月にも石灯籠を寄付しています。境内の石造物は多くはなく、昭和29年（1954）10月に氏子中が石鳥居、昭和53年（1978）8月に氏子惣代が本殿前の石灯籠、平成18年（2006）12月に平野新田自治会が幟台を寄付しているのみです。また、拝殿の中には平成元年（1989）10月に平野新田区が作成した「平野新田共同施行土地改良事業（水田区画整理）竣工記念」額が掲げられています。



平野神社鳥居



境内



語り部小川さんの説明



狛犬

加治敬一は、今回訪れた平野新田墓地に墓碑があります。敬一は、安政元年（1854）4月13日に平野新田庄屋加治庄吉安慶の子として生まれ、明治元年（1868）に大垣俵町の医師四代飯沼龍夫（百蔵）の門人となりました。百蔵の父二代龍夫長順（1783～1865、号慾斎）は伊勢国亀山で西村信左衛門の二男として生まれ、初代龍夫長顕の長女志保と結婚して飯沼家に入りました。美濃国で初めて種痘や人体解剖を行った医師としての業績のみならず、本草学にも精通していたことで知られます。『員弁郡医師会百年史』では、大垣藩医江馬蘭斎（1747～1838、春齡）の教えも受けたとしています。敬一の入門前に蘭斎はすでに亡く

なっています。敬一は大垣で7年、桑名病院で3年の修行を終えた後、平野新田に戻って医院を開業しました。明治12年(1879)5月に共救社医員、大正3年(1914)4月に員弁郡医師会評議員、大正15年(1926)11月に員弁郡医師会副会長を務め、郷土の医学発展に寄与しました。昭和9年(1934)10月10日に医業の休業届を提出し、昭和12年(1937)11月8日に没しました。戒名は釈敬道信士です。墓碑には妻沢野(1857~1933、海津市海津町安田新田の山田家出身)とともに両者の履歴が刻まれています。沢野は昭和8年(1933)6月15日に敬一に先立って大阪で病没しました。戒名は釈尼智芳信女。

教昌寺

岡本 浩平

平野神社を出て、ゆるやかな坂道を鼓の教昌寺へ向かった。

教昌寺は浄土真宗本願寺派の寺で、山号は光耀山、本尊は阿弥陀如来です。にこやかなご住職の説明を聞く。

天正2年(1574)織田信長勢の長島侵攻により、難を逃れた長島住人の津坂氏は当地に移住した。鼓の庄屋8代渡辺三野右衛門の庇護を受けて草庵を建て、ご本尊を安置して自ら看坊となった。津坂氏逝去の後、三野右衛門は庄屋を息子の三郎右衛門に譲り、京都興性寺で得度し、釈教昌の法名を受けて後継の看坊となった。のち天保11年(1840)真宗興正派から本願寺派に転派した。弘化4年(1847)旧本堂を鍋坂説教場へ売却し、庄屋10代渡辺三郎右衛門の尽力によって現在の本堂が建立された。

本堂軒下に吊された喚鐘は、渡辺氏が寄進したものといわれ、「慶長十二(1607)丁未十一月鑄之」とあり、桑名の鑄物師・広瀬九良兵衛の名が刻まれています。

このお寺で昼食となりました。午後には法要が営まれるため、本堂をお借りすることはできなかったのですが、ご住職がわれわれのために境内に廃材を並べておいてくださいました。暖かい日差しの中、ちょうど昼を告げる梵鐘の音に聞き惚れながら弁当をとりました。



教昌寺鐘楼



教昌寺



ご住職の説明



ご本尊



喚鐘



境内でお昼をいただく

波羅神社～貝野神社

近藤 順子

波羅神社

お昼を食べた教昌寺を最後に出発。入れ違いに法要に参加される檀家さんがぼちぼち来られる。波羅神社に続く道はさらに上りで、最後に境内まで急な階段が続く。たどり着いたころには、語り部の小川さんの話が始まっており、説明の終わりの遊びネタ、「全国の神社の数、88,000 社。お寺の数、77,000 ヶ寺。コンビニの数、55,000 店舗の部分だけしか聞けなかったの、小川さんから資料をいただく。



波羅神社



境内



語り部小川さんの説明

主祭神は、素戔嗚命(すさのおのみこと)。創建年は不詳。神紋は葵。但し、狛犬に応永 32 年 (1425 年) 4 月吉日と刻されているので、足利義満権勢の室町時代 (約 600 年前) と思われる。

鼓地区は古来より独立した村としての歴史があり当神社は氏神として村人の信仰熱い神社であった。故に境内の樹木も壮大である。明治 5 年には村社となり、明治 4 2 年には八剣社・山神社・近隣の大辻村社も合祀した (後に分祀)。

大正元年の台風により杉の大木が倒れ本殿全壊、拝殿半壊となったが、多くの倒れた木を売却して費用を捻出し、大正4年に再建した。

貝野神社

これまでは上り坂であったが、鼓から阿下喜までは下り坂となり、また、見晴らしもよく、山裾に桜が満開なのが見て取れる。神社の境内では、桜祭りが終了して役員さんたちが後片付けの最中でしたが、東貝野区長の伊藤勉さんが、爽やかな口調で神社の縁起を話してください。

年月は不詳。古くから豊受大社（とようけのおおかみ）を主神とする貝野神社があり、合殿として中之社があった。故に当社を貝野神社と呼んでいた。尚、貝野神社は1200年の神亀年中に現在の所より東北の社護司塚に祀られていたとも言われている。

明治40年12月八幡社、走井社、稲荷社、水上社、山神社（三社）を合祀した。

八幡社はもと「つつじはら」（現水田）にあり、天正年間織田信長に追われて東貝野に難を逃れていたが、阿下喜城主片山大和守信保が後に阿下喜城の鬼門除けに祀られていた八幡社をここに移して祀ったといわれている。



貝野神社



拝殿



区長伊藤勉さんの説明



俵の見本



燈籠

貝野神社の一年の一番大きな大祭（10月）には青年団による「おみおく練り」の行事が

あったが、少子化により現在はなくなっている。

「おみおく練り」とは、無病息災、健康安全等を祈願する神事である。

大祭の前日行事の準備として、もち米に青豆入れ、蒸し上げたものを、若者たちが神社当番組の組長宅へ出向き、おにぎり状に丸く固くにぎり、杉葉を敷き詰めた俵に入れることから始まる。当日の祭典後お祓いを受けた若者たちが、俵を持って境内を練りまわり、俵からおにぎりを参拝者に振舞う行事である。このおにぎりを食すれば無病息災であるといわれていることより、参拝者は「おくれ」「おくれ」の掛け声でおにぎりを取り合ったりした。

勝泉寺

水谷 一夫

貝野神社を出発して道は貝野川に向かう下り坂とはいえ、次の目的地、勝泉寺まで2キロ近くあって列は自然に長くなる。境内の枝垂れ桜（エドヒガン）は散り始めていたが、ちょうど見頃の花を枝に付けて私たちを待っていてくれた。ご住職は到着した私たちを本堂に招き入れて下さり、お寺の由緒などを話して頂きました。



勝泉寺本堂



ご住職の説明



本堂横の枝垂れ桜

天皇山勝泉寺は真宗大谷派、本尊は阿弥陀如来である。

天平年中(729～748)行基により開基、天野寺と称して東貝野に在ったと伝えられる。寛和年間(985～987)花山天皇の勅願によって伊勢国の鈴鹿・庵芸・飯高・三重・員弁の5郡に1ヶ寺ずつを建立することになって、員弁郡では天野寺を西貝野字宮の下に移転して改築、天王寺と改称した。しかし、永保2年(1082)原因不明の火災に罹って全焼、のち再建したが、永享12年(1440)雷火により再び焼失した。

貞永年間(1232～33)国司北畠顕能の次男顯俊は一志郡木造に築城して木造家を興した。応永年中(1394～1427)3代木造俊康は西貝野の山野に支城を築いて当地を領地としたが、文明元年(1469)5代木造政宗の時、太田道灌に攻められ落城したため、政宗の次男は出家して当山に入り木造善勝と号した。文明11年(1479)蓮如上人が巡錫の際、上人に帰依し、天台宗から浄土真宗に改宗した。

天正8年(1580)織田信長の兵火に遭って堂宇の総てを焼失したが、天正13年(158

5)新しい境内を現在の岡山坂に求めて諸堂を再建した。その後、寛文12年(1672)木仏本尊と「天皇山勝泉寺」の寺号が下付された。また、元文2年(1737)と天保14年(1843)に老朽化した本堂を再建している。さらに鐘楼は昭和34年(1959)伊勢湾台風により倒壊したので、昭和40年に再建した。

境内のエドヒガンは天保14年(1843)本堂の再建を祝って植樹されたもので、毎年3月下旬満開になる。

前日の4月8日は花祭り、境内でギターのライブコンサートが催され、一夜限りのライトアップも行われて遅くまで賑わったとのことでした。ところでこの時期、当寺で一番困っていることが、エドヒガンの開花状況を電話で問い合わせることで、寺のお務めに差し障りもあるので、「今日、参詣して頂いた皆さんは風の噂に耳をすませて、花の咲いたことを察してお越し下さい。」とのお話しでした。また、お話しが終わって参加した皆さんの拍手を聞いて「今まで何回となく法話をしましたが拍手を頂くことは今日が初めてです。」のお言葉に一同大笑いでした。

勝泉寺を出てすぐ南の墓地に立つ姿の良いエドヒガン、東の田んぼに水が張ってあるとちょっと引き立つのではと思った。しかし、マナーを心得ない近頃の迷カメラマン氏は平気で田畑や他家の庭に入り込んでくるので、今のままが良いでしょう。



第28回北勢線の魅力を探る 報告書
「春深し 山里かける ナローゲージ」

編集・発行：北勢線の魅力を探る会

代表：近藤順子

連絡先：いなべ市員弁町大泉732

TEL 080-3073-3313

E-mail j-kondo@cty-net.ne.jp

発行日：2017年6月6日

本報告書の著作権は上記発行者に帰属しています。
ご利用の際はご一報ください。

ブログ：<http://blog.canpan.info/hokuseisenn/>